

— 原著 —

顎変形症患者における外科的矯正治療後アンケート調査

小島 拓¹⁾, 倉部華奈¹⁾, 加藤祐介^{2,3)}, 長谷部大地²⁾, 齋藤 功⁴⁾, 小林正治²⁾¹⁾ 富山県立中央病院歯科口腔外科 (主任: 小島 拓医長)²⁾ 新潟大学大学院医歯学総合研究科顎顔面再建学講座組織再建口腔外科学分野 (主任: 小林正治教授)³⁾ 新潟大学地域医療教育センター魚沼基幹病院歯科口腔外科 (主任: 加納浩之部長)⁴⁾ 新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食環境制御学講座歯科矯正学分野 (主任: 齋藤 功教授)

A questionnaire study after surgical orthodontic treatment in patients with jaw deformities

Taku Kojima¹⁾, Kana Kurabe¹⁾, Yusuke Kato^{2,3)}, Daichi Hasebe²⁾, Isao Saito⁴⁾, Tadaharu Kobayashi²⁾¹⁾ Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Toyama Prefectural Central Hospital (Chief: Dr. Taku Kojima)²⁾ Division of Reconstructive Surgery for Oral and Maxillofacial Region, Faculty of Dentistry & Graduate School of Medical and Dental sciences, Niigata University (Chief: Prof. Tadaharu Kobayashi)³⁾ Clinic of Oral and Maxillofacial Surgery, Niigata Prefectural Community Medicine Institute Uonuma Kikan Hospital (Chief: Dr. Hiroyuki Kano)⁴⁾ Division of Orthodontics, Faculty of Dentistry & Graduate School of Medical and Dental sciences, Niigata University Chief: Prof. Isao Saito

令和2年10月7日受付 令和2年11月9日受理

Key words:

jaw deformity (顎変形症), orthognathic surgery (顎矯正手術), questionnaire study (アンケート調査)

和文抄録:

外科的矯正治療の結果を患者側の観点から評価するため、術後アンケート調査を行ったので報告する。

対象は、2001年1月から2010年12月までの10年間に新潟大学医歯学総合病院口腔再建外科で顎矯正手術を施行した顎変形症患者のうち回答が得られた165名(男性34名, 女性131名, 手術時平均年齢24歳)で、回収率は26%であった。臨床診断は下顎前突症が112名と最も多く、手術の内訳は上下顎移動術が116名と最も多かった。質問内容は、治療動機、顎顔面形態、顎口腔機能、心理についてで、原則として“はい”、“いいえ”、“どちらともいえない”の三者択一で回答してもらった。顔貌、不正咬合といった形態異常が主訴の92%を占め、咀嚼障害、発音障害、顎関節症状といった機能障害は主訴の8%であった。手術の結果に対しては86%が満足していたが、術後の下唇知覚異常、後戻り、顔貌に対して不満が残る症例があった。術後の咀嚼、発音は、それぞれ75%、28%に改善を認めた。手術後の性格について36%の患者で前向きな変化を示し、顎矯正手術が患者の心理面に陽性の影響を及ぼすことが示唆された。

Abstract:

The purpose of this study was to assess whether patients with jaw deformities were satisfied with the results of treatment. Questionnaires were sent to 640 patients who had undergone orthognathic surgery in the clinic of Oral and Maxillofacial Surgery, Niigata University Medical and Dental Hospital during the period from 2001 to 2010. One-hundred sixty five questionnaires (response rate of 26%) were returned from 34 males and 131 females with valid answers. The mean age of the patients at the time of surgery was 24 years. The most common deformity was mandibular prognathism in 112 of the patients and the most common operation was maxilla-mandibular osteotomy in 116 of the patients. Questions about “treatment motives”, “appearance”, “oral function” and “psychology” were answered as a threefold choice: “Yes”, “No” or “Neither”. Morphological disturbances such as facial appearance and occlusal disharmony occupied 92% of the chief complaints, while dysfunctions such as masticatory disturbance, speech difficulties and TMJ signs and symptoms occupied 8% of them. Eighty-six percent of the patients answered that they were satisfied with the postsurgical outcomes as to their

main problems, but some patients were dissatisfied with the results due to paresthesia of the lips or chin, relapse and postoperative facial appearance. Improvements in masticatory function and speech were recognized by 75% and 28% of the patients, respectively. Psychologically, 36% of the patients noted favorable changes in personality after the surgery, so that orthognathic surgery has a positive influence on the psychologic status of patients with jaw deformities as well.

【緒 言】

顎変形症患者に対する外科的矯正治療は、顎口腔機能や美的不調和の改善だけでなく、患者の抱える心理社会的問題の改善にも寄与すると言われている^{1,2)}。そのため、医療者は患者の抱える機能的、形態的、心理的ならびに社会的問題を理解し、個々の患者にあった医療を提供することが望まれる。したがって、治療成績の評価においても客観的評価だけでなく、患者の主観的評価も検討すべきと考えられる。外科的矯正治療の結果を患者側の観点から評価する方法としてアンケート調査があるが、われわれはこれまでに1970年代、1980年代、1990年代に顎矯正手術を行った顎変形症患者に対して術後アンケート調査を行ってきた^{3,4,5)}。今回、2000年代に顎矯正手術を施行した患者に対して術後アンケート調査を行い、検討した。

【対象および方法】

1. 調査対象

対象は、2001年1月から2010年12月までの10年間に新潟大学医歯学総合病院口腔再建外科で顎矯正手術を施行した顎変形症患者640名に対して、術後3年以上経過時にアンケートを郵送し、回答が得られた165名とした。内訳は男性34名、女性131名で、回収率は26%であった。手術時の平均年齢は24歳、アンケート回答時の平均年齢は32歳であった。

診断名の内訳は、下顎前突症（上顎後退症を合併する症例を含む）112名、下顎後退症（上顎前突症を合併する症例を含む）25名、非対称症例12名、上下顎前突症11名、開咬症2名、上顎後退症2名、上顎前突症1名であった。

手術の内訳は、上下顎移動術が116名（70%）と最も多く、次いで下顎単独移動術が46名（28%）、上顎単独移動術が3名（2%）であった。詳細な術式の内訳は、両側下顎枝矢状分割法46例、Le Fort I型骨切り術2例、Le Fort I型骨切り術＋両側下顎枝矢状分割法95名、Le Fort I型骨切り術＋片側下顎枝矢状分割法＋片側下顎枝垂直骨切り術1例、多分割Le Fort I型骨切り術＋両側下顎枝矢状分割法8例、多分割Le Fort I型骨切り術＋下顎前歯部歯槽骨切り術＋両側下顎枝矢状分割法1例、上顎前歯部歯槽骨切り術1例、上顎前歯部歯槽骨

切り術＋両側下顎枝矢状分割法7例、上顎前歯部歯槽骨切り術＋下顎前歯部歯槽骨切り術＋両側下顎枝矢状分割法3例、上顎臼歯部歯槽骨切り術＋両側下顎枝矢状分割法1例で、そのうち18名においてオトガイ形成術を二期的に施行していた。

2. アンケート内容

アンケートの内容は、治療動機、顎顔面形態、顎口腔機能、心理などに関する30項目で、原則として“はい”、“いいえ”、“どちらともいえない”の三者択一で回答してもらい、そのうち12項目には記述式を併用した。

- ① 矯正歯科を受診した理由はなんですか。
- ② 手術をどうやって知りましたか。
- ③ 手術を受けるにあたり、初めは躊躇（ちゅうちよ）しましたか。躊躇した場合、それはなぜですか。
- ④ 外科的治療をしようと決心した主な理由はなんですか。
- ⑤ 手術で一番治したかったことはなんですか。また、それはいつ頃から気になっていましたか。
- ⑥ 手術前に困っていたことはありますか。あった場合、それはどんなことですか。
- ⑦ 手術前は、食べ物をかみきったり、かみくだいたりするのが大変でしたか。
- ⑧ 手術前に発音しにくかったり、話しづらいつと感じることがありましたか。
- ⑨ 手術前、口を開けにくかったり顎を左右に動かすににくいと感じることがありましたか。また顎の関節（耳の前方部）に痛みがありましたか。
- ⑩ 手術前にいびきをかくことがありましたか。
- ⑪ 手術前は顔の形が気になっていましたか。気になっていた場合、主にどんなことですか。
- ⑫ 手術後、一番つらかったのはいつですか。また、何がつらかったですか。
- ⑬ 手術前に一番治したかったことは、術後改善しましたか。
- ⑭ 手術前に困っていたことは、術後改善しましたか。
- ⑮ 手術後、食べ物をかみ切ったり、かみくだいたりしやすくなりましたか。
- ⑯ 手術後、発音がしやすくなったり、話しやすくなりましたか。
- ⑰ 術後、口を開けにくかったり、顎を左右に動かすににくいことがありますか。また、顎の関節（耳の前方部）に痛みがありますか。